

ライフマスク 1993-1998 —ミツバチの巣を使った作品製作—

清野 泰行

ライフマスク 1993-1996

このシリーズは1993年当時、研修派遣で滞在していたニューヨークで始まった。それ以前は木版画で光と闇の幻想的世界を表現してきたが、環境の変化とともに私の興味の対象も大きく変わった。木版画は御存じのように木の板を彫刻刀で彫り、ブラシやローラーで絵の具を版面にのせ、そこに紙を置きバレンなどで圧をかけ紙の表面にイメージを印刷していく、もっとも古い版画技法のひとつであるが、私はニューヨークという大都市の路上表面を版として考え、そこから取った型をもとにして、別次元にレリーフ状のオブジェを作る表現を試みた。型取りという欲求は、自分がそこに存在していた記録を残す行為として、人が観光地で気に入った景色や自分の写真を撮りたくなる心理と似ているだろう。

「ライフマスク」はそもそも人間の顔を型取ったマスク(仮面)のことを言うのだが、できあがったレリーフも、現代社会の象徴と言える大都市の皮膚を型取ったマスクであるという考



図1 路面の型どりをする

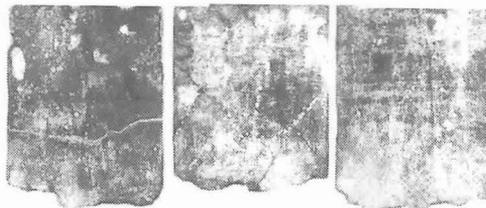


図2 95年に発表した作品

えから作品のタイトルとなっている。そこには「デスマスク」のように完結した形ではなく常に変化していく表情の記録物という意味を込めている。その中に路上が迎ってきた時間、さらにそこに関わってきた自分の存在を凝縮しているのである。

型取りは通常人通りの少ない深夜か早朝行なうのだが公の場所を占拠してしまうため、作業は1時間以内に終えなければならない(図1)。這いつくばるように型を取っているときは自分がそこに存在している実感が強くなる瞬間だ。

作品の形態は色の付いた樹脂石膏のレリーフだが、石膏の表面にペインティングするのではなく通常の版画の行程と同じように型(版)の方に色を付け、そこへ石膏を流すことで色と形を同時に凝固させている。雪のちらつく深夜、静かな日曜日の朝、秋の住宅地に響く靴の音、色は私がお場で受けた印象となってイメージされ、都市空間の断片である形と融合しているのである。石膏に吸収された絵の具の付き方は型を剥がすまでわからない。偶然変化した路上の表面に私が興味をもったように色の定着も吸収力と重力に任せてある。このようにして自分以外の力も借りて作品は成り立っている(図2)。

ライフマスクー縮図 1997-1998

帰国してから3年後の97年からは、私のイメージする日本の現社会の様相をレリーフで表現しようとしている。今回は実在する都市の一部から型を取って表現するのではなく、ミツバチの巣と数字群を使って、よりスケールの大きい社会の具体化を目指している。この巣は路上の凹凸と違い、巣そのものを作品の中に取り込める大きさであったが、型を使って違う素材の石膏に置き換えることにあくまでも拘わったのは、ミツバチの巣が持つ自然のイメージより、コンクリートに囲まれた人工的な社会空間を表現したかったからである。

ミツバチの巣を人間社会の縮図に喩えたのは、人口密度の高い都市空間が、小さな巣箱の中の世界のように思えたからである。薄っぺらな壁で仕切られた無数の部屋を持つ巨大なマンションや同じような家が立ち並ぶ住宅地、そこで姿形の似た人々が忙しそうに動いている様を見れば容易にイメージすることができるだろう。そもそも人が生活する上で大切な「居・食・住」の「住」は巣を営む一巣むの意からきている。ミツバチの巣にも似た居住空間を作って、我々は外敵や自然の脅威から身を守りながら進化、繁栄してきたのだ。

また巣の他に作品の中で登場する数字群は、そんな社会を取り巻く人間共通の記号として描いている。これらの数字はIDカード、電話等の個人記録、通帳に示された金額、順位、地位などの基準として現代社会には欠かすことのできない記号なのだが、それには絶対的な価値はなく今日意味のある数字の配列でも、ただの記号の羅列になってしまう可能性を秘めている。この数字と巣を同次元に表現することで、我々の社会がいかに不確かでうつろいやすい数字と密接に結びついて機能しているかを強調しようとしている。

制作プロセス

作業は蜂の巣の型を作るところから始まるのだが、近所で蜂の巣を見つけることは困難であ

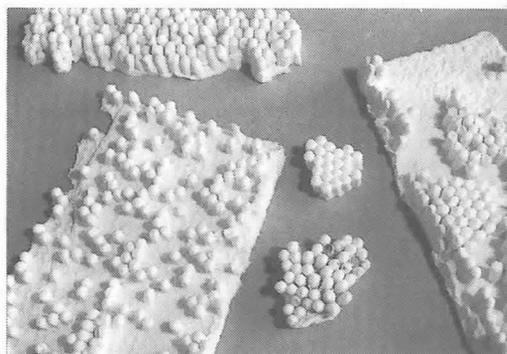


図3 ハチの巣から取った型

るため、型取り用の巣を求めて玉川大学ミツバチ科学研究施設を訪れた。幸運にもそこで様々な形の巣を見せて頂くことができ、貴重な巣を何枚か分けて頂けたお陰で「ライフマスクー縮図」の制作の実現が早期可能となった。映像でしか見たことのなかったミツバチの巣に接することで、その機能美、造形美や構造を間近に観察することができ、巣を使った新しいマスク作品へのイメージが膨らんだ。

1. 巣の型取り

実際蜂の巣を型取りすることは、路上の単純な凹凸を取るより難しく、型取りの素材を替えながら作業を進めた。前作で使った型取り材「コピック」での流し込みでは、粘度が高く、硬化時間が早いため、巣穴の中の空気が完全に抜ける前に固まってしまう、それに石膏を流してできた形は巣とは思えないものになってしまった。(型取り材などについては注参照)

そこでこのフォームを注射器に入れ、巣穴の一つ一つに注入してみたがフォームの硬化時間が5、6分と短いため、一回では狭い範囲の型取りしかできず、初期の作品でしかこの方法を取らなかった。次に用いた「シームレスシリコン」は低粘度で硬化時間が遅いため気泡が残りがづらく、ひっぱり強度も高いので、石膏を流した後の離型で石膏の損傷を最小限にすることが出来るため、雌型の素材としてはこれが最適だろう。

巣全体(片面)を型取るため、1.5~2kgのシリコンが必要となる。硬化後の離型では繊細な巣が壊れてしまうことは避けられないが、型は何度も使用ができるので多くの石膏の巣を取



図4 数字部分の型

ることが可能だ。できあがったシリコンの巣型は好みの形に切り取って様々な形の型も作った(図3)。

2. 数字の版製作

もう一つの版(型)は数字が堆積しているように板を彫刻刀で彫り、モデリングペーストで起伏をつけてある。前作同様版上の絵の具が樹脂石膏の方に付きやすくするために、版の表面にクリアラッカーを塗っておく(図4)。

3. 流し込み

絵の具をのせた数字の版の上にシリコンの巣型を置いたり、シリコンの型から作った石膏の巣を好みの形にカットしたものを裏返しにして置いておく。この時流した石膏がこれらの底に回り込まないように粘土で隙間を塞いでおく。これで流し込みの準備が完了である(図5)。

流し込みには石膏の中でもっとも丈夫な樹脂石膏を使っている。これは精密模型の成型にも使われていて細部の形まで写し取ることができる。健康サンダルのような突起が密集したシリコンの蜂の巣型に石膏を流すため、混水量を少し増やして粘度を低くし型の底まで石膏が行き



図5 流し込みの準備

届くようにしておく。

石膏は8分ほど攪拌して数字の版上の小さいシリコンの巣型が動かないように静かに流し込む。この時レリーフの軽量化と強化のためにパネルを沈める。硬化は1時間で終わるが、まだ強度が十分でないため半日たってから離型する。

裏返して置いた巣は石膏板に埋まったようになり、シリコンの巣型は注意深く取ることによってそこに巣穴が誕生する。この様は蜂の巣が象徴する現社会が数字の海に漂っているようでもあり数字の堆積によって覆われいくようにも見える。

石膏で出来た巣の壁は非常に薄いため離型時に欠けてしまう部分があり、実物と同じ形は再現できないが、私はミツバチの巣の完全なコピーを求めているのではない。なぜなら人の手が入ることによって変形し壊され石化した巣の方が、かえって人が作り上げた歪な都市空間の形によく似ているからである。経済を最優先させて建設された我々の居住空間はミツバチが創造した美しい巣には遠く及ばないのである(図6)。

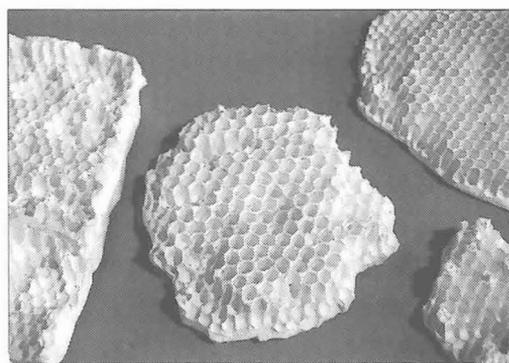


図6 石膏の巣



図7 ペインティング



図8 完成した作品（撮影：野村 昇平）

4. ペインティング

今回は出来上がったレリーフにさらに着色することを積極的に行なっている（図7）。絵の具はフレスコ画のように水を含んだ石膏に浸透するため、流し込みの時に型に付いた絵の具が石膏に吸収されるのと同じように色というイメージがレリーフと一体化する感覚でペインティングできるのである。

雨によって作られた鉄錆の流れや太陽光や酸化による変色のような色使いは、時間の経過を表わし、深い青色は表面的な凹凸を超え新しい空間を作り出すのである。こうして作品は物質としてのオブジェではなく、イメージ空間を持ったレリーフとして出来上がる（図8）。

巣の形の持つ存在感と比喩的要素、無意味な数字群、時間の流れと空間を作る色彩、これらが複雑に混ざり合ったイメージの世界を型取ったものが、私の考える都市の「ライフマスク」なのである。

〒270-0034 松戸市新松戸 6-162)

[注]

コピック（型取り材）硬化時間が短いため人体部分、顔などにも適している。乾くと変形するためできるだけ早く石膏などを流す必要がある

硬化時間 7～8分（気温・水温 20℃）

ハイストーン HLP 型（樹脂石膏）表面硬度が大きく緻密で滑らかな型が得られる

シームレスシリコン（型取り材）伸び、引裂き強度が高く、逆テーパーや複雑な形状に適している。硬化時間 10～15時間（23℃）

YASUYUKI KIYONO. Life Mask — Epitome — Production of work using a honeybee comb. *Honeybee Science* (1998) 19(4): 155-158. 6-162, Shinmatsudo, Matsudo, Chiba, 270-0034 Japan.

I regard a beehive as a minature of human society, and make a mold from a real bee comb and express the artificial social space surrounded by concrete in a relief using a plastic plaster. In addition, I try to emphasize the more human, chaotic word by combining a disordered group of numbers with the same dimension.